

特集「教育施設での動物飼育に対する獣医師の思い」

桑原 保光

はじめに

近年、家庭で飼育されている動物は、ペットからコンパニオン・アニマルという呼び方が広まり、今日では多くの動物達が家族の一員として迎えられ、ヒトと動物の関係がより密接になってきました。しかし一方では、ヒトと動物の関係や動物に対する社会の受け止め方や、個人の飼育動物に対する考え方は一層多様化し、海外の珍しい動物を飼育している人も増えています。我々獣医師を含めて個人の動物観にはいろいろな違いがみられています。この点では学校飼育動物についても同様であり、「生物観察のための単なる教材」という考え方から、「家庭動物と同様に子どものペットとしての癒し効果の期待」、「思いやりのある円満な人格形成への効用」等に至るまで、いろいろな有用性が期待されています。さらに、最近では動物飼育の有用性や効果が科学的にも実証されるようになりました。

動物飼育の目的がいずれにあるにせよ、学校で飼育する動物は第一に健康であることが重要であります。わが国では住宅事情等から子どもから教職員に至るまで、家庭で動物を飼った経験に乏しい場合が少なくありません。そのため、動物本来の生態がどのようなものであり、動物にはどのような環境が好ましいのか、水や餌はどのようにして与えるのがよいか等々、動物を健康に飼うための基本事項にも通じていない場合が多く見られます。まして、動物の状態や挙動から病気の兆しを察知して早めに対策を講じるという段になると、知識と経験がほとんどないのが多くの実情ではないでしょうか。

獣医師が学校飼育動物の飼育管理指導や治療等に当たっては、これらの現状を十分理解したうえで対応し、学校での動物飼育の教育的意義と動物愛護を前提とし、関係者の経験に応じて健康な動物の飼育に意欲を持って従事できるように指導することが求められてい

ます。また、動物愛護との関連については、「動物の愛護及び管理に関する法律」の下で告示された「家庭動物等の飼養及び保管に関する基準」の中で、「学校、福祉施設等における管理者は、動物の飼養及び保管が、獣医師等十分な知識と飼養経験を有する者の指導の下に行われるよう努めること。」とされており、この視点をも含めて学校飼育動物や教育関連施設に関する獣医師の指導性が強く求められているものと理解しています。しかし、教育行政に携わる方々や教育施設では、獣医師が飼育されている動物の飼育管理指導等を行う場合に、教育現場の考え方や状況は一様ではないため混乱や誤解を招いていることや、獣医師との連携ができていない教育関連施設が多く存在しています。これからは、動物飼育の教育的意義と活用方法を見直し、獣医師との連携で全国版の目的別飼育管理指導基準を作ることが必要であると考えています。また、今回は教育関連施設での飼育動物に対する基本的な考え方について獣医師の視点で例を示してみます。

1 動物飼育は何のため？

ある学校の飼育委員会活動で、話をしていた時のことです。その日は、「なぜヒトは動物を飼うのだろう」という題で、飼う側と飼われる側の、良い点、問題点、などの話をしていました。話が学校の動物に及び、「どうして学校にウサギがいるのだろう」と聞くと、ある子どもから「給食の残りを食べさせるため」と答えが返ってきました。皆さんはこの話を聞いてどう思われますか。もちろんすべてではありませんが、学校の多くの現場では、大きな飼育小屋に、たくさんのウサギや鶏が放し飼いにされ、飼育委員会の当番さんと、飼育担当の先生が、休み時間に忙しく、世話をしているのが現状です。世話は飼育委員に限定され、他の子どもは飼育小屋に入ることは

もちろん、餌を与えることもできません。飼育委員も動物達の、水を取り換えたり、餌をあげるのに手一杯で、動物をゆっくり観察したり、動物と遊んだりする時間と余裕はありません。動物の方は、多頭飼育が原因でウサギはなわばり争いの結果、耳や皮膚にカミ傷や、強い雄や雌におしっこを掛けられ毛が茶色くなったりします。鶏は強いオスにつつかれて羽が抜け、頭や尾から血を流していることが見受けられることが多々あります。

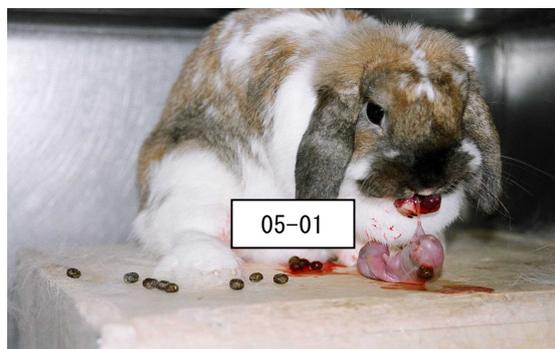
残念ながら学校での飼育方法は、予算不足や考え方の違いで、動物を飼ってリラックスをするという愛玩飼育の本質から外れていることが多く、そこに飼育の難しさを感じるのではないのでしょうか。

ウサギの飼育目的は何か考えて下さい。家畜として飼うのですか、展示動物として飼っているのでしょうか、目的によって飼育方法と動物種を決めてから飼育を開始することが重要であると考えています。

2 命の大切さを感じ取れる飼い方になっていきますか？

いろいろな経験をさせたい。これは大人が子どもにさせてあげたいと願うことのひとつです。特に命にかかわる経験はなかなかできるものではありません。命、それは人間にとっても、動物にとっても尊いものです。動物を飼って生死を体験することは、子どもにとって貴重な経験になるという考え方があります。しかし、ただ動物に接して、動物の生死を経験してもそれは有意義だったとは言いきれません。校庭の片隅であまり世話もされずに息絶えてゆく動物を見て良い経験をしたといえるのでしょうか。生活習慣の一部として動物の世話をし、その動物と同じ時間を過ごしたからこそ、その動物に対する思いと、その生死は子どもにとって有意義な経験になるのではないのでしょうか。大事に世話をした動物が病気になり、心配や不安な気持ちで一生懸命看病し早く元気になる事を願ってその命をなくした時、人は初めて深い悲しみとその命の大切さを知ることとなります。楽しいこと、悲しいことは、世話をした年月と思い入れの深さに比例しているのではないのでしょうか。

命の大切さを知るには、バーチャルではなく実体験が不可欠ですが、子どもたちが生き物と触れ合い、遊び、観察し、世話をする上で、自分たちと同じ命を持っていることに気づき、その中で、生き物の変化や成長の様子に関心を持ち、生きていることの大切さを理解すると考えています。時には失敗することもあるかもしれませんが、それも命を考えるひとつのきっかけとし、その場合は必ずその時点で課題を改善し、原因を究明し指導する事が必要です。こうした実践は自然や生き物への親しみと思いやる心の育成の中で一番重要な基礎になると思います。



ウサギの出産 胎盤処理の様子

3 飼育頭数と飼育舎構造改善のお願い

動物を飼うということは、動物の苦手な人にとって想像以上に大変なことかもしれません。まして学校の決められている飼育舎で、限られた予算と時間の中で、動物にできるだけ快適な生活を送らせることは、それ相当の努力と工夫が必要になるからです。機械的に餌と水を与えて掃除をして飼育当番が終る、これで飼育なののでしょうか。

多くの学校の飼育舎は、昔の動物園がそうであった様に、外から見て楽しみ、観察できるように作られています。子どもたちはそこを時々覗くだけで実際の飼育はほとんどの場合、飼育委員や、先生方の手に委ねられています。今日の動物飼育の必要性は、観察だけでなく、動物に触れたり、遊んだり、世話をしたりという実体験から得られる、五感すべてへの刺激、興味、愛情、周りとの協力、また、それらから生まれるであろう思いやりなどにあると考えています。

動物飼育は、動物種別に適正な飼育舎と飼

育数を守れば飼育のトラブルは激減します。動物が臭くて汚いのは多頭飼育等で掃除と管理が行き届かないためだと考えてください。

動物がきれいでかわいいと思えるように環境改善をお願いします。



4 名前をつけて下さい！

『名前ってとても大事です。名前がないと動物たちのことをお友達に話す時に困ります。名前がないと動物たちの性格や好き食べ物、好きな遊びがなかなかわかりません。

名前を知っているお友達と知らない子、気になるのはどっち？ 学校のみんが名前を知っていると、「今日のはうさ吉がタンポポの葉っぱをおいしそうに食べたよ」ってみんなに教えてあげることができます。名前を知っているとその子のことがとても良くわかって仲良しになれます。名前を知っていると、、、もっともっと素敵なお友達がいます。学校のみんが動物たちの名前がわかるようにしてあげてね。』

みなさんの学校や幼稚園の動物には名前がありますか？ みなさんが名前を知っていますか？好きな食べ物が何か知っていますか？どんな性格かわかりますか？動物にも個性があります。我が家のウサギは世界一かわいいけれどしたたかなウサギです。同じ人間同士だと

嫌なことも、動物が相手だと許せることがあります。素敵なお友達がいたり、意地悪なところも動物だと受け入れることができる心の余裕が持てます。

私はそんな風にしてだんだん大人になりました。

学校の動物たちをもう一度ゆっくりご覧に

なって下さい。彼らにも個性があって楽しいですよ。そんな動物たちと子ども達はどんな付き合い方をしているでしょう。いつもとは違った子どもと動物が見えてくるかもしれません。学校で飼っている動物と子どもたちを温かい目で見守る先生と保護者のみなさんを獣医師はお手伝い致します。困ったことがあったら近くの獣医師会に相談して下さい。

*日本小動物獣医師会 第1号『がっこう動物新聞』より抜粋

飼育は経験が重要な要素となっていますが、経験豊富な獣医師と連携してみませんか。



5 目的に合った動物種の選択をして下さい

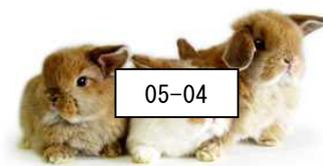
小学校では学年や体力に応じた動物種の選択が重要で、生活科等の飼育体験が動物嫌いの原因にならないよう教育的配慮が必要になります。

生活科の動物飼育では、子どもが動物の親代わりになって世話ができるような愛情飼育を目的に動物を選択して下さい。

新規に動物を導入する場合は、飼育目的と飼育頭数を決め、純粋種の導入を考えて下さい。

学校に適している小動物の純粋種として①モルモット②小型種のウサギ(ネザーランド、ホーランドロップ)③セキセイインコ④ハムスター等、予算に合わせて検討してみてください。

導入に際しては獣医師に相談して下さい。





6 子どもと動物のかかわり方

子どもと動物の理想的な関係は、子どもと動物がお互いに触れ合い楽しい時間を過ごすことから始まり、人に慣れてリラックスしている動物と遊ぶことは楽しいもので、人が近づくと嬉しそうにそばに寄って来るような動物と飼育体験をさせたいと考えています。できるだけ人に慣れて、触れられてもストレスをそれほど感じない動物を活用することが必要です。

動物とのふれあいを繰り返すことにより、子どもは動物の様子や動きを良く感じ取れるようになり、相手が喜んでいるのか迷惑しているのかを判断し、それに対応した行動や先を予測した行動が多く見られるようになります。このように、動物とふれあい遊びを通して、動物の動作や息吹、柔らかさ、暖かさなど、命を感じると共に動物個体の性格や動物種の特徴なども理解できるようになります。継続的な飼育活動から動物に対する愛情が生まれ放っておけない存在になり、責任を持つて世話をするようになります。

動物飼育体験で、相手の気持ちが理解できるような子どもに育てたいと願っています。

7 動物はかわいいだけですか？

(地球のリーダーとしての役割)

ウサギの動物ふれあい教室を行なって子どもたちに「ウサギに触ってどうだった？」と聞くと、「かわいかった」「暖かかった」「ふわふわしていた」などの答えが返ってきます。また、「ウサギの耳はなぜ長いの?」、「目の位置が人とどうして違うの?」など人との体の違いに気づくこともあります。なぜそうなっ

ているかを説明すると、子どもだけではなく大人の方も強い関心をもたれます。聴診器でウサギと人の心臓の音を聞き比べ、その音に驚いたり、小さな動物のお母さんが赤ちゃんを産み世話をしている様子を観察し、感動したり感心したりします。子どもたちにとって身近な動物とふれあうことは、命の不思議さや、神秘性、多様性などを知る第一歩で生命観が身につく体験となります。

子どもたちには家庭で愛されている動物や身近な動物の他にも、人が暮らすために役に立つ動物、ウシやブタなどのフードアニマル、盲導犬、救助犬などの使役動物がいること、また数え切れないほどたくさんの野生動物が、我々人間と同じ地球上で暮らしていることを、飼育活動を通じて知ってほしいと思います。これらの動物はそれぞれ「種の保存」のため、群れやなわばりなどの秩序を持ちながら、お互いに関わりあい、地球という生態系を維持しています。人間が地球上の生き物の頂点にいてという考え方があり、今まで人間は他の生き物の生活環境を変え、生態に大きな影響を与えて来ました。私たちが、これからも地球で幸せに生活して行くには、地球上の限られた資源と環境を大切に、生き物と共生していかなければなりません。子どもたちは、飼育体験を通じて生命の尊さを知り、人間には地球上のリーダーとして大切な役割があることを学習し、生きる力を身につけていけることを願っています。



(全国学校飼育動物研究会副会長/
桑原動物病院院長)